

# 犯人

太宰治

青空文庫



「僕はあるあなたを愛しています」とブルミンは言  
った。「心から、あなたを、愛しています」

マリヤ・ガヴリーロヴナは、さっと顔をあから  
めて、いよいよ深くうなだれた。

——プウシキン（吹雪）

なんとという平凡。わかい男女の恋の会話は、いや、案外おとな

どうしの恋の会話も、はたで聞いては、その陳腐ちんぷ、きざったらしさに全身鳥肌とりはだの立つ思いがする。

けれども、これは、笑つてばかりもすまされぬ。おそろしい事件が起つた。

同じ会社に勤めている若い男と若い女である。男は二十六歳、鶴田つるた慶助。同僚は、鶴、鶴、と呼んでいる。女は、二十一歳、小森ひで、同僚は、森ちゃん、と呼んでいる。鶴と、森ちゃんとは、好き合っている。

晩秋の或る日あ曜日、ふたりは東京郊外の井いの頭かしら公園であいびきをした。午前十時。

時刻も悪ければ、場所も悪かった。けれども二人には、金が無

かった。いばらの奥深く搔きわけて行つても、すぐ傍を分別顔の、子供づれの家族がとおる。ふたり切りになれない。ふたりは、お互いに、ふたり切りになりたくてたまらないのに、でも、それを相手に見破られるのが羞しいので、空の蒼さ、紅葉のはかなさ、美しさ、空気の清浄、社会の混沌、正直者は馬鹿を見る、等という事を、すべて上の空で語り合い、お弁当はわけ合つて食べ、詩以外には何も念頭に無いというあどけない表情を努めて、晩秋の寒さをこらえ、午後三時には、さすがに男は浮かぬ顔になり、「帰ろうか。」

と言う。

「そうね。」

と女は言い、それから一言、つまらぬことを口走った。

「一緒に帰れるお家があったら、幸福ね。帰って、火をおこして、……三畳一間でも、……」

笑ってはいけない。恋の会話は、かならずこのように陳腐なものだが、しかし、この一言が、若い男の胸を、柄つかもとおれと突き刺した。

部屋。

鶴は会社の世田谷の寮にいた。六畳一間に、同僚と三人の起居である。森ちゃんは高円寺の、叔母おばの家に寄寓きんぐう。会社から帰ると、女中がわりに立ち働く。

鶴の姉は、三鷹みたかの小さい肉屋に嫁とついでいる。あそこの家の二階

が二間。

鶴はその日、森ちゃんを吉祥寺きちじょうじ駅まで送って、森ちゃんには高円寺行きの切符を、自分は三鷹行きの切符を買い、プラットフォムの混雑にまぎれて、そつと森ちゃんの手を握ってから、別れた。部屋を見つける、という意味で手を握ったのである。

「や、いらつしやい。」

店では小僧がひとり、肉切庖ぼうちょう丁をといでいる。

「兄さんは？」

「おでかけです。」

「どこへ？」

「寄り合い。」

「また、飲みだな？」

義兄は大酒飲みである。家で神妙に働いている事は珍らしい。

「姉さんはいるだろう。」

「ええ、二階でしょう？」

「あがるぜ。」

姉は、ことしの春に生れた女の子に乳をふくませ添寝そいねしていた。

「貸してもいいって、兄さんは言っていたんだよ。」

「そりやそう言ったかも知れないけど、あのひとの一存では、きめられませんよ。私のほうにも都合があります。」

「どんな都合？」

「そんな事は、お前さんに言う必要は無い。」

「パンパンに貸すのか？」

「そうでしよう。」

「姉さん、僕はこんど結婚するんだぜ。たのむから貸してくれ。」

「お前さんの月給はいくらなの？　自分ひとりでも食べて行けないくせに。部屋代がいまどれくらいか、知ってるのかい。」

「そりや、女のひとにも、いくらか助けてもらって、……」

「鏡を見たことがある？　女にみつがせる顔かね。」

「そうか。いい。たのまない。」

立って、二階から降り、あきらめきれず、むらむらと憎しみが燃えて逆上し、店の肉切庖丁を一本手にとつて、

「姉さんが要いるそうだ。貸して。」

と言ひ捨て階段をかけ上り、いきなり、やった。

姉は声も立てずにたおれ、血は噴出して鶴の顔にかかる。部屋の隅すみにあつた子供のおしめで顔を拭ふき、荒い呼吸をしながら下の部屋へ行き、店の売上げを入れてある手文庫から数千円わしづかみにしてジャンパーのポケットにねじ込み、店にはその時お客が二、三人かたまつてはいつて来て、小僧はいそがしく、

「お帰りですか？」

「そう。兄さんによろしく。」

外へ出る。黄昏たそがれて霧が立ちこめ、会社のひけどきの混雑。掻きわけて駅にすすむ。東京までの切符を買う。プラットフォームで、上りの電車を待つているあいだの永かつたこと。わっ！ と叫び

出したい発作。悪寒<sup>おかん</sup>。尿意。自分で自分の身の上が、信じられなかった。他人の表情がみな、のどかに、平和に見えて、薄暗いプラットフォームに、ひとり離れて立ちつくし、ただ荒い呼吸をし続けている。

ほんの四、五分待っていただけなのだが、すくなくとも三十分は待った心地である。電車が来た。混<sup>こ</sup>んでいる。乗る。電車の中は、人の体温で生あたたかく、そうして、ひどく速力が鈍い。電車の中で、走りたい気持。

吉祥寺、西荻窪<sup>おぎくぼ</sup>、……おそい、実にのろい。電車の窓のひび割れたガラスの、そのひびの波状の線のとおり指先をたどらせ、撫<sup>な</sup>でさすって思わず、悲しい重い溜<sup>ため</sup>息<sup>いき</sup>をもらした。

高円寺。降りようか。一瞬ぐらぐらめまいした。森ちゃんに一目あいたくて、全身が熱くなつた。姉を殺した記憶もふっ飛ぶ。いまはただ、部屋を借りられなかった失敗の残念だけが、鶴の胸をしめつける。ふたり一緒に会社から帰って、火をおこして、笑い合いながら夕食して、ラジオを聞いて寝る、その部屋が、借りられなかった口惜しさ。人を殺した恐怖など、その無念の情にくらべると、もののかずでないのは、こいをしている若者の場合、きわめて当然の事なのである。

<sup>はげ</sup> 烈しく動揺して、一步、扉口のほうに向って踏み出した時、高円寺発車。すつと扉が閉じられる。

ジャンパーのポケットに手をつつ込むと、おびただしい紙屑<sup>かみくず</sup>

が指先に当る。何だろう。はつと気がつく。金だ。ほのぼのと救われる。よし、遊ぼう。鶴は若い男である。

東京駅下車。ことしの春、よその会社と野球の試合をして、勝つて、その時、上役に連れられて、日本橋の「さくら」という待合に行き、スズメという鶴よりも二つ三つ年上の芸者にもてた。それから、飲食店閉鎖へいさの命令の出る直前に、もういちど、上役のお供で「さくら」に行き、スズメに逢った。

「閉鎖になつても、この家へおいでになつて私を呼んで下さつたら、いつでも逢えますわよ。」

鶴はそれを思い出し、午後七時、日本橋の「さくら」の玄関に立ち、落ちついて彼の会社の名を告げ、スズメに用事がある、と

少し顔を赤くして言い、女中にも誰にもあやしまれず、奥の二階の部屋に通され、早速ドテラに着かえながら、お風呂は？ とたずね、どうぞ、と案内せられ、その時、

「ひとりものは、つらいよ。ついでにお洗濯だ。」

とはにかんだ顔をして言つて、すこし血痕けっこんのついているワイシャツとカラアをかかえ込み、

「あら、こちらで致しますわ。」

と女中に言われて、

「いや、馴なれているんです。うまいものです。」

と極めて自然に断る。

血痕はなかなか落ちなかつた。洗濯をすまし、鬚ひげを剃そつて、い

い男になり、部屋へ帰って、洗濯物は衣桁いこうにかけ、他の衣類をた  
んねんに調べて血痕のついていないのを見とどけ、それからお茶  
をつづけさまに三杯飲み、ごろりと寝ころがって眼をとじたが、  
寝ておられず、むっくり起き上ったところへ、素人しろうとふうに装っ  
たスズメがやって来て、

「おや、しばらく。」

「酒が手にはいらなにかね。」

「はいりますでしよう。ウイスキーでも、いいの?」

「かまわない。買ってくれ。」

ジャンパーのポケットから、一つかみの百円紙幣を取り出して、  
投げてやる。

「こんなに、たくさん要らないわよ。」

「要るだけ、とればいいじゃないか。」

「おあずかり致します。」

「ついでに、たばこもね。」

「たばこは？」

「軽いのがいい。手巻きは、ごめんだよ。」

スズメが部屋から出て行ったとたんに、停電。まっくら闇の中で、鶴は、にわかにおそろしくなった。ひそひそ何か話声が聞える。しかし、それは空耳だった。廊下で、忍ぶ足音が聞える。しかし、それも空耳であった。鶴は呼吸が苦しく、大声挙げて泣きたいと思ったが、一滴の涙も出なかった。ただ、胸の鼓動が異様

に劇<sup>はげ</sup>しく、脚が抜けるようにだるかった。鶴は寝ころび、右腕を両眼に強く押しあて、泣く真似をした。そうして小声で、森ちゃんごめんよ、と言った。

「こんばんは。慶ちゃん。」鶴の名は、慶助である。

蚊<sup>か</sup>の泣くような細い女の声で、そう言うのを、たしかに聞き、髪<sup>かみ</sup>の逆立つ思いで狂ったようにはね起き、襖<sup>ふすま</sup>をあけて廊下に飛び出た。廊下は、しんの闇で、遠くから幽<sup>かす</sup>かに電車の音が聞えた。

階段の下が、ほの明るくなり、豆ランプを持ったスズメがあらわれ、鶴を見ておどろき、

「ま、あなた、何をしていらっしやる。」

豆ランプの光で見るスズメの顔は醜<sup>みに</sup>くかった。森ちゃんが、こ

いしい。

「ひとりで、こわかったんだよ。」

「闇屋さん、闇におどろく。」

自分があのお金を、何か闇商売でもやってもうけたものと、スズメが思い込んでいるらしいのを知って、鶴は、ちよつと気が軽くなり、はしやぎたくなつた。

「酒は？」

「女中さんにたのみました。すぐ持つてまいりますつて。このころは、へんに、ややこしくつて、いやねえ。」

ウイスキー、つまみもの、煙草。女中は、盗人の如く足音を忍ばせて持ち運んで来た。

「おしずかに、お飲みになつて下さいよ。」

「心得ている。」

鶴は、大闇師のように、泰然たいぜんとそう答えて、笑つた。

その下には紺碧こんぺきにまさる青き流れ、

その上には黄金こがねなす陽の光。

されど、

憩いこいを知らぬ帆は、

嵐の中にこそ平穩のあるが如くに、

せつに狂瀾きやうらん怒濤んどとうをのみ求むる也なり。

あわれ、あらしに憩いありとや。鶴は所謂いわゆる文学青年では無い。  
頗るすこぶのんきな、スポーツマンである。けれども、恋人の森ちゃん  
は、いつも文学の本を一冊か二冊、ハンドバッグの中に入れて持  
つて歩いて、そうしてけさの、井の頭公園のあいびきの時も、レ  
エルモントフとかいう、二十八歳で決闘して倒れたロシヤの天才  
詩人の詩集を鶴に読んで聞かせて、詩などには、ちつとも何も興  
味の無かつた鶴も、その詩集の中の詩は、すべて大いに気にいつ  
て、殊ことにも「帆」という題の若々しく乱暴な詩は、最も彼の現在  
の恋の心にぴったりと来たのだそうので、彼は森ちゃんに命じて何  
度も何度も繰りかえして朗読させたものである。

嵐の中にこそ、平穩、……。あらしの中にこそ、……。

鶴は、スズメを相手に、豆ランプの光のもとでウイスキーを飲み、しだいに楽しく酔って行つた。午後十時ちかく、部屋の電燈がパツとついたが、しかし、その時にはもう、電燈の光も、豆ランプのほのかな光さえ、鶴には必要でなかつた。

あかつき。

ドオウン。その気配を見た事のあるひとは知つていゝらう。日の出以前のあの暁ドオウンの気配は、決して爽そうかい快なものではない。おどろおどろ神々の怒りの太鼓の音が聞えて、朝日の光とまるつきり違あずきう何の光か、ねばっこい小豆色の光が、樹々の梢こずえを血なま臭く染める。陰惨さんび、酸鼻さんびの気配に近い。

鶴は、かわや廁の窓から秋のドオウンの凄すこさを見て、胸が張り裂けそ

うになり、亡者のように顔色を失い、ふらふら部屋へ帰り、口をあけて眠りこけているスズメの枕元にあぐらをかき、ゆうべのウイスキイの残りを立てつづけにあおる。

金はまだある。

酔いが発して来て、蒲団ふとんにもぐり込み、スズメを抱く。寝ながら、またウイスキイをあおる。とろとろと浅く眠る。眼がさめると、つちもさつちも行かない自分のいまの身の上が、いやにハッキリ自覚せられ、額ひたいに油汗がわいて出て来て、悶えもた、スズメにさらにウイスキイを一本買わせる。飲む。抱く。とろとろ眠る。眼がさめると、また飲む。

やがて夕方、ウイスキイを一口飲みかけても吐きそうになり、

「帰る。」

と、苦しい息の下から一ことそう言うのさえやつとで、何か冗談を言おうと思つても、すぐ吐きそうになり、黙つて這う<sup>は</sup>ようにして衣服を取りまとめ、スズメに手伝わせて、どうやら身なりを整え、絶えず吐き氣とたたかいながら、つまずき、よろめき、日本橋の待合「さくら」を出た。

外は冬ちかい黄昏<sup>たそがれ</sup>。あれから、一昼夜。橋のたもとの、夕刊を買う人の行列の中にはいる。三種類の夕刊を買う。片端から調べ<sup>る</sup>。出ていない。出ていないのが、かえつて不安であつた。記事差止め。秘密裡に犯人を追跡しているのに違い無い。

こうしては、おられない。金のある限りは逃げて、そうして最

後は自殺だ。

鶴は、つかまえられて、そうして肉親の者たち、会社の者たちに、怒られ悲しまれ、気味悪がられ、ののしられ、うらみを言われるのが、何としても、イヤで、おそろしくてたまらなかつた。

しかし、疲れている。

まだ、新聞には出ていない。

鶴は度胸をきめて、会社の世田谷の寮に立ち向う。自分の巢で一晩ぐっすり眠りたかつた。

寮では六畳一間に、同僚と三人で寝起きしている。同僚たちは、まちに遊びに出たらしく、留守である。この辺は所謂いわゆる便乗線とかいうものなのか、電燈はつく。鶴の机の上には、コップに投げ

いれられた銭菊ぜにぎくが、少し花卉が黒ずんでしなびたまま、主人の帰りを待つていた。

黙って蒲団をひいて、電燈を消して、寝た、が、すぐまた起きて、電燈をつけて、寝て、片手で顔を覆おおい、小声で、あああ、と言つて、やがて、死んだように深く眠る。

朝、同僚のひとりにゆり起された。

「おい、鶴。どこを、ほつつき歩いていたんだ。三鷹の兄さんから、何べんも会社へ電話が来て、われわれ弱つたぞ。鶴がいたなら、大至急、三鷹へ寄こしてくれるようにという電話なんだ。急病人でも出来たんじやないか？　ところがお前は欠勤で、寮にも帰って来ないし、森ちゃんも心当りが無いと言うし、とにかくき

ようは三鷹へ行つて見ろ。ただ事でないような兄さんの口調だつたぜ。」

鶴は、そうけだ総毛立つ思ひである。

「ただ、来いとだけ言ったのか。他には、何も？」

既にはね起きてズボンをはいている。

「うん、何でも急用らしい。すぐ行つて来たほうがいい。」

「行つて来る。」

何が何だか、鶴にはわけがわからなくなつて来た。自分の身の上が、まだ、世間とつながる事が出来るのか。一瞬、夢見るような気持になつたが、あわててそれを否定した。自分は人類の敵だ。殺人鬼である。

既に人間では無いのである。世間の者どもは全部、力を集中してこの鬼一匹を追い廻しているのだ。もはや、それこそ蜘蛛くもの巣のように、自分をつかまえる網が行く先、行く先に張りめぐらされているのかも知れぬ。しかし、自分にはまだ金がある。金さえあれば、つかのまでも、恐怖を忘れて遊ぶ事が出来る。逃げられるところまでは、逃げてみたい。どうにもならなくなった時には、自殺。

鶴は洗面所で歯を強くみがき、歯ブラシを口にふくんだまま食堂に行き、食卓に置かれてある数種類の新聞のうらおもてを殺氣立った眼つきをして調べる。出ていない。どの新聞も、鶴の事に就ついては、ひっそり沈黙している。この不安。スパイが無言で自

分の背後に立っているような不安。ひたひたと眼に見えぬ洪水が闇の底を這って押し寄せて来ているような不安。いまに、ドカンと致命的な爆発が起りそうな不安。

鶴は洗面所で嗽うがいして、顔も洗わず部屋へ帰って押入れをあけ、自分の行李こうりの中から、夏服、シャツ、銘めい仙せんの裕あわせ、兵古帯へこおび、毛布、運動靴、スルメ三把ぼ、銀笛、アルバム、売却できそうな品物を片端から取り出して、リュックにつめ、机上の目覚時計までジャンパーのポケットにいれて、朝食もとらず、

「三鷹へ行って来る。」

と、かすれた声で呟つぶやくように言い、リュックを背負っておろろ寮を出る。

まず、井の頭線で渋谷に出る。渋谷で品物を全部たたき売ってリユツクまで売り捨てる。五千円以上のお金はいった。

渋谷から地下鉄。新橋下車。銀座のほうに歩きかけて、やめて、川の近くのバラツクの薬局から眠り薬プロバリン、二百錠入を一箱買い求め、新橋駅に引きかえし、大阪行きの切符と急行券を手した。大阪へ行ってどうするというあても無いのだが、汽車に乗ったら、少しは不安も消えるような気がしたのであった。それに、鶴はこれまで一度も関西に行った事が無い。この世のなごりに、関西で遊ぶのも悪くなかろう。関西の女は、いいそうだ。自分には、金があるのだ。一万円ちかくある。

駅の附近のマーケットから食料品をどっさり仕入れ、昼すこし

過ぎ、汽車に乗る。急行列車は案外にすいていて、鶴は楽に座席に腰かけられた。

汽車は走る。鶴は、ふと、詩を作ってみたと思った。無趣味な鶴にとつて、それは奇怪といつてもよいほど、いかにも唐突きわまる衝動であつた。たしかに生れてはじめて味う本当にへんな誘惑であつた。人間は死期が近づくにつれて、どんなに俗な野暮やぼ天てんでも、奇妙に、詩というものに心をひかれて来るものらしい。辞世の歌とか俳句とかいうものを、高利貸でも大臣でも、とかくよみたがるようではないか。

鶴は、浮かぬ顔して、首を振り、胸のポケットから手帖を取り出し、鉛筆をなめた。うまく出来たら、森ちゃんに送ろう。かた

みである。

鶴は、ゆつくり手帖に書く。

われに、プロバリン、二百錠あり。

飲めば、死ぬ。

いのち、

それだけ書いて、もうつまってしまった。あと、何も書く事が無い。読みかえしてみても一向に、つまらない。下手へたである。鶴は、にがいものを食べたみたいに、しんから不機嫌そうに顔をしかめた。手帖のそのページを破り捨てる。詩は、あきらめて、こ

んどは、三鷹の義兄に宛てた遺書の作製をこころみる。

私は死にます。

こんどは、犬か猫になって生れて来ます。

もうまた、書く事が無くなった。しばらく、手帖のその文面を見つめ、ふっと窓のほうに顔をそむけ、熟柿じゅくしのような醜い泣きべその顔になる。

さて、汽車は既に、静岡県下にはいつている。

それからの鶴の消息に就いては、鶴の近親の者たちの調査も推測も行きとどかず、どうもはつきりは、わからない。

五日ほど経たった早朝、鶴は、突如、京都市左京区の某商会にあ  
らわれ、かつて戦友だったとかいう北川という社員に面会を求め、  
二人で京都のまちを歩き、鶴は軽快に古着屋ののれんをくぐり、  
身につけていたジャンパー、ワイシャツ、セーター、ズボン、冗  
談を言いながら全部売り払い、かわりに古着の兵隊服上下を買い、  
浮いた金で昼から二人で酒を飲み、それから、大陽気で北川とい  
う青年とわかれ、自分ひとり京阪四条駅から大津に向う。なぜ、  
大津などに行ったのかは不明である。

宵よの天津をただふらふら歩き廻り、酒もあちこちで、かなり飲  
んだ様子で、同夜八時頃、大津駅前、秋月旅館の玄関先に泥酔の  
姿で現われる。

江戸っ子らしい巻舌で一夜の宿を求め、部屋に案内されるや、すぐさま仰向に寝ころがり、両脚を烈しくばたばたさせ、番頭の持つて行った宿帳には、それでもちやんと正しく住所姓名を記し、酔い覚めの水をたのみ、やたらと飲んで、それから、その水でブロバリン二百錠一気にやった模様である。

鶴の死骸しがいの枕元には、数種類の新聞と五十銭紙幣二枚と十銭紙幣一枚、それだけ散らばって在ったきりで、他には所持品、皆無であつたそうである。

鶴の殺人は、とうとう、どの新聞にも出なかつたけれども、鶴の自殺は、関西の新聞の片隅に小さく出た。

京都の某商会に勤めている北川という青年はおどろき、大津に急行する。宿の者とも相談し、とにかく、鶴の東京の寮に打電する。寮から、人が、三鷹の義兄の許もとに馳はせつける。

姉の左腕の傷はまだ糸が抜けず、左腕を白布で首に吊つっている。義兄は、相変らず酔っていて、

「おもて沙汰にしたくねえので、きょうまであちこち心当りを捜していたのが、わるかった。」

姉はただもう涙を流し、若い者の阿呆らしい色恋も、ばかにならぬと思ひ知る。



# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年1月23日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 犯人

太宰治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>